みよしキラッとインタビュー

素敵な人みーつけた

今回のキラッとインタビューは多福寺参道脇にある食事処「楽々（らら）」の店主、菅原法子さんを訪ねた。

今が一番幸せという菅原さんは保護司、更生保護女性会、料理教室、華道教室と多方面に活躍しているが、その活動の原点はどこにあるのだろうか？

保護司　菅原法子さん

人のために生きるのが使命
ー私の歩んだ道ー

私の名前は法子とかいてミチコと読みますが、お坊さんが付けてくれました。人のために生きるのが、私の使命だと思っています。叔母がよく「情けは人のためならず」と言っていましたが、本当に人のためというより自分のためなんだと思います。

父の教育方針は〝男の子は10歳、女の子は13歳で親元を離れ経験させる〟ということでした。私は中学1年の時、北海道から、東京に出ていた兄の所へ出されてしまい、食事の支度などをしていたことが自立への道につながったと思っています。

母がガンのため北大病院に入院、半年持ちませんと言われましたが、〝医者と言うより食べ物〟ではないかと思い、反対を押し切り、退院をさせて、西洋医学と東洋医学の両方で治療している京都の名医の近所に移り住みました。

母親を介護していた時、埼玉から京都まで、毎週、毎週車を飛ばして、見舞いに来てくれたパンチパーマの22歳の男性。それが1年半も続いた。その男性こそ、以前バスハイクで知り合った夫の菅原伸悦です。

結婚後は3世代同居の中で、嫁として嵐のような時代があった。今、そのことを感謝してくれている夫がいて、若い時よりも優しくなって協力してくれています。

地域とのかかわりをうかがうと
ー食事処「楽々」のことー

自治会長をやらせてもらったときに、ここで一生を終えていくには隣近所の方と支えあっていくしかない、それには自治会活動は大事と思いました。ただ、外出できる方はいいのですが、出てこられない方にどうやって目を向けるかが課題ですね。以前、木ノ宮住宅でも「一人暮らしの食事会」があり、参加予定の方が来ないので訪ねたところ倒れていたということがありました。

皆で楽しくおしゃべりをしたり、相談事を聞いたり地域のつながりを持ちながら、「食事もでき」しかも「安価で！」そんな場所をもちたいと思ったのが「楽々」のはじまりです。

また、若いお母さん達に料理を通して食の大切さを教えていきたいという思いもありました。

念願の店も持ち、今では味噌作り、梅干作り、等の仲間作りにも日々楽しんでいます。

食事処　楽々（らら）

自宅で趣味の華道と料理教室

若いころから華道は続いているけれど、お花は楽しむためのものと思っています。

30年続いている料理教室の始まりは、まわりの遊びに来ていた人たちが、「おいしい！この料理教えくれませんか」と請われ、始めたのが今まで続いています。子どもたちも、アレルギー等多くなり、若いお母さん方は大変です。美味しい料理をつくって、一緒に食べると心が解けていく。健康を第一に考えて、季節のものを大切にすることを心がけています。

また若い人たちとの情報交換の場となり私の方も多くを学びながら、来てくれている人たちが悩んだとき、相談しやすい私でありたい、と思っています。

立ち直りを支える「地域のチカラ」
ー保護司・更生保護女性会ー

保護司（＊1）は平成26年からやっています。保護司は法務省の認可で任命され、犯罪を犯した人の更生に力を貸すことですが、保護司にならなくても、犯罪が起きないよう地域で見守ることも大事です。「福祉のはざまにある人たちが大変なのよ。例えば生活保護を受けないぎりぎりの人たちが、一番大変なの。」そういった隙間を埋めるようなところで役に立ちたいと思い、三芳地区更生保護女性会（＊2）にも参加して、活動しています。

地域の力

- 協力事業主
- 更生保護施設
- ＢＢＳ会（青年ボランティア団体）

＊1 保護司
罪を犯して保護観察を受けることになった人を見守り、相談、助言を行う民間ボランティア。

更生保護女性会
＊2 三芳地区更生保護女性会（略称：更女会）
三芳町に更女会ができたのは４年前、今では80名の会員がいる。三芳地区の特色は愛の募金などの活動のほかに、学校と連携をとり、中学校では家庭科授業の実習ボランティア、小学校では瓢箪の育成を手伝い、夏休みには水遣りをしている。

インタビューを終えて・・・
ーキラッと光る生き様ー

菅原法子さんは、本物の勇気をもって、自分の信じた道を歩いてきた。これは人として当たり前のことのようにも思えるが、今の時代、周囲に流されたり風見鶏だったりなかなか当たり前のことができないことが多い。

13歳で実兄の食事の支度を一切引き受け、22歳で母の看病を引き受け、嫁いでからは、男女役割分担の中で嫁として、義父母の晩年の介護を引き受け、その大変な中で人間の本質を見据え、多くのことを実体験の中から学んできている。決して逃げ出したりはせず、真正面から受け止めてきた。

家族に向けてきた奉仕の精神、優しさは、今、地域の人々に向けられている。

楽々で食事をし、自宅を訪問し話をうかがうにつれて、この沢山の活動が地域のつながり、人々への愛情へと一本の線につながっていることを実感してきた。

「今が一番幸せ」という菅原さんには「いつでも誰でも集える場所をつくる」という大きな夢があるそうだ。菅原さんの指摘はどこでも抱えている問題。インタビューした面々も大いに刺激をうけて帰路についた。

（インタビュアー　横山・高橋・神奈川・吉田）